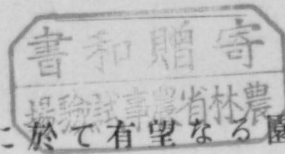


臺灣總督府

中央研究所農業部彙報

第百八號



昭和十年二月

第十卷

第八號

臺灣に於て有望なる園藝作物

第一報

臺灣總督府中央研究所

昭和十年二月

本彙報は本島に於ける園藝作物の中、當部にて  
試作せる結果其成績良好にして將來有望なる作物  
として採用し得べきものに就き其耕種概要を記述  
せるものにして、一般當事者の參考に資せんが爲  
之を印刷に附す。

昭和十年二月

臺灣總督府中央研究所農業部長

農學博士 澁谷紀三郎

臺灣に於て有望なる園藝作物

第一報

目次

一 草莓「臺農莓」	1
二 成歡瓜	6
三 三池甘藍	11
四 タロー	13
五 マツシユルーム	16

## 臺灣に於て有望なる園藝作物\*

### 第一報

技師 櫻井芳次郎

囑託 安倍輝吉

#### 一、草莓「臺農莓」

本島に於て領臺後屢々草莓(學名 *Fragaria* L.)の種苗を内地より移入し各地にて栽培を試みたるものあれども、多くは培養一、二年にして根絶し失敗に歸したり。之が主なる原因は夏季高温にして或は乾燥に過ぎ或は多濕に陥り氣象的要素の不良なる爲か、然らざれば病害及蟲害等により枯死根絶するに至りたるもの、如し。されば本島の風土に適合せる良品種を選択して強健なる苗を養成し本圃に於ける栽培管理に注意することは蓋し本島に於ける草莓栽培上緊急なることなり。農業部に於ては十數年來繼續し栽培保存したる草莓より、強健なる系統「臺農莓」を選出するを得たるを以て容易に本島平地に於ける草莓栽培を可能ならしむるに至れり。

\*臺灣農事報 第三三九號別刷

臺 農 苺



臺農苺は之を内地の優良大粒種と比較する時は尙稍劣る所あれども、栽培の容易にして大量栽培に適し、收穫時期長く島内消費用としては充分其目的を達し得べし。猶當部に於ては多くの苺品種を蒐集し鋭意研究中なるを以て更に優良種を選出し得べきを確信す。

(一) 品種 十數年前札幌苺系の母株を移入し其後繼續栽培して品種の維持に努め小數の残存株より本種臺農苺を選出したり。此選出品種は繁殖力強くして本島夏季の氣候に耐え即ち高温、乾燥或は多濕に對する抵抗力強く頗る強健なり。果は長倒卵形を呈し結果多く一期に引續き5—6果梗を出し稀に50—60果を着生するこゝあり。果は稍小なれども摘果を適當に行ふ時は1果7—8g(2匁内外)に及ぶものあり。酸味稍多けれども砂糖及牛乳等を加へて生食するによく充分商品するに足る。此外目下當部試験中の86品種の中優良なるは邦產四季成苺、「ブランデワイン」「オリオンサンマー」「アーエスト、オブ、オール」(一名加賀見苺)「クラークシードリング」等なり、

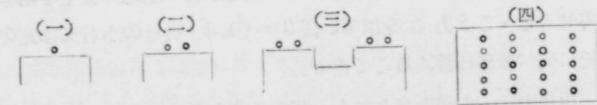
猶是等につきては今後繼續培養試験の要あるものなり。

(二) 栽培法 苺栽培上内地に於ける醜熟物を利用するフリューム栽培法或は石垣を應用する促成栽培法は、本島に在りては收支經濟上猶研究の餘地多きを以て茲には主として露地栽培につき要領を記せり。

土質—砂質壤土、壤土及埴質壤土等を可ます。埴質地にありては堆肥を多量に施用し土壤を澎軟ならしむべし。

栽植期—越夏せる走<sup>ランナー</sup>蔓を圃地に於て其儘培養し、本植用に供する場合は十月下旬乃至十一月中旬を可ます。走蔓を九月下旬乃至十月中旬に假植せるものは十一月乃至一月上旬迄に本植するを可ます。二、三月頃晩植せるものは開花時期遅れ結實期短く良果を得難し。

栽植距離—内地に於ては一度定植する時は數箇年間植替を行はざるものもあれど、本島に於ては毎年新植するの要あり。従て株間の距離を近くし密植するを可ます。栽植の方法は種々あれども(一)畦幅45cm(1尺5寸)株間21cm(7寸)即ち10a(約1反)當10,200株植(二)畦幅60cm(2尺)二列植株間30cm(1尺)即ち10a當10,800株植するこゝあり、又(三)埴質地又は排水良好ならざる土地に於ては二畦包畦高畦とし、幅は畦溝共1.8m(6尺)にして二列植株間30cm(1尺)とするときは10a當7,200株を栽植し得べし。若し(四)高畦に横植する場合は、畦の幅1.5m(5尺)にして溝幅30cm(1尺)に取り列間30cm(1尺)株間21cm(7寸)とす、然るときは10a當12,600株植となる。



整地及定植—畑地を深耕し丁寧に土塊を碎き縦畦の場合は畦幅に従ひ45cm(1尺5寸)又は60cm(2尺)毎に深さ18cm(6寸)内外の溝を切り、之に元肥を施し土壤を能く混合し覆土して高さ6cm(2寸)内外の小畦を作る、小畦の中央部に一列又は二列に苗を定植す、二列の場合は千鳥形に植すべし。廣畦にして横植する場合は前記の如く畦を作り元肥を撒布し丁寧に切り込

み整地して定植す、定植2—3時間前苗床に灌水して根に土の附着を容易ならしめ1株宛抜き探り豫定の位置に栽植す、而して根元は少しく押し定植を終る。定植後は充分灌水し尙1週間内外毎夕灌水して活着を助く。

肥料—苗の養成に於けるこ異り本圃に於て若し肥料の不足を來す時は開花結實及品質に及ぼす關係頗る大なり、本島に於ては結實期間長きを以て自ら肥料の施用量を多くする必要あり。

肥料の種類及其施用量等に関しては猶試験中に屬すれども大約次の標準に依るを可とす(10<sup>a</sup>當施用量)

追 肥

肥料名	元肥	1回	2回	3回	4回	5回	6回	計
	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
堆肥	2,250	—	—	—	—	—	—	2,250
人糞尿	750	—	—	—	—	—	—	750
鯨粕又は油粕	40	—	—	40	—	40	—	120
過磷酸石灰	75	—	—	—	—	—	—	75
木灰	75	—	—	—	—	—	—	75
硫酸アンモン	—	10	10	—	10	—	10	40
施用期	定植前	十一月 又は十二月	一月中旬	二月上旬	二月下旬	三月中旬	四月上旬	

敷藁—活着後降雨による泥跳を防ぐ爲め株元に藁、籾殻等を敷くを普通とす。然れども結果期に多濕なる地方に於ては之が爲め蛭蝨ナメクジの發生を招き屢々果を喰害せらるゝ、こあるを以て、徑3cm(1寸)内外の小石又は瓦の破片等を株元に列べ敷藁に替ふることあり。

除草—生育中3—4回除草をなし、莓の生育を助くべし。

摘果—花梗の發生は苗の栽植時期により異なる、概して1年を通し3—4回の結果期を有し一期に1株より引續き3—4本又は5—6本の花梗を發生し之が完熟後株の勢力を恢復し第二期の開花を始むるもの、如し。斯くして十月又は十一月に栽植すれば六月に收穫を終る。花梗の發生こ其結果を自然に放任する時は品種により1株より花梗5—6本1花梗に約10果を算する

ことあり。斯の如く多數の果を結ばしむる時は果小にして良品を得ること能はず。故に良果を收めんこせば形狀正しく成長の見込あるもの1花梗につき2果内外を残し他は悉く摘除するを可とす。

防風—冬季生育中季節風強く之に伴ふ降雨及冷氣を催す地方に於ては適宜防風装置をなすを要す。

袋掛—特に良大果を得んとせば果の小指頭大となりたるこき、1果宛宛パライン紙又は新聞紙にて作れる袋を掛け果の損傷を防ぐべし。

病蟲害防除

1. 生育中2—3回石灰ボールド液を撒布すべし。
2. 根部病害により株の枯死せるものある時は根元の土と共に速に除去すべし。
3. 結果時期に於て株元に蝸牛カタツムリ、蛭蝨ナメクジの發生を見るこきは直に捕殺すべし。

收穫—莓果は品種、果の大小、開花時期等により異なれども開花後30日乃至50—60日にして成熟するものなるを以て、果の3分の2内外着色せる時收穫す。收穫は毎日早朝又は夕刻に行ひ果の損傷せざる様果梗を附し1果宛摘み採り荷造を行ふものこす。

(三) 苗の養成法 本法に就ては猶未だ研究中に屬すれども、從來の試験成績に依れば本島に於ては夏季の高温時には専ら母株及苗の枯死を防止し、是等を保持する程度に止め、初秋より培養に努め移植用に供するを可とす。夏季苗の生育を保持するには次の方法に依るを可とす。

- A. 夏季稍冷涼なる高地に於て育苗を行ふ(高地養成法)。
  - B. 十一月、十二月頃苗の小なるものを假植し置き、三、四月頃特に之を採苗用母株として本植し簇出する花梗を摘除し結果を避け之より發生せる走蔓を越夏せしめ苗となすべし(苗専門養成法)。
  - C. 十月乃至十一月頃苗を本植し充分結實せしめ、五、六月以降發生せる走蔓を保護し苗こなす(普通法)。
- 以上の内A法は特殊の位置にして普通之に據るこ能はざれども、B法及

C法は一般に實行し得る方法なり。猶是等を行ふ場合特に注意すべき事項を次に掲ぐ。

1. 夏期中肥料特に窒素質肥料の使用を避け草苺畑を殆ど無肥料状態に置き發育を促さざること。
2. 普通法に由る果實採收後苗の養成をなすには五、六月頃の走蔓發生時までに圃地には特に窒素成分の大部分が消耗し居る様肥料の配合及施用法に注意すること、夏期圃地に窒素其他の肥料養分過多に残存する時は徒長罹病して枯死するもの續出するに至るべし。
3. 苗養成中圃地の乾燥に失するこまなき様朝夕充分灌水して常に適當の濕氣を保たしむること、草苺の根は淺根性なるを以て旱害に罹り易し、されば灌漑し易き畑地或は水田を草苺畑とするを便す。
4. 三月頃敷藁又は之に換ふべき被覆物をなすこと、但敷藁を晩期に多くなすは走蔓の生育を害す。
5. 病害豫防のため株元に木灰を撒布し猶生育中2—3回石灰ボールド液を撒布すること。
6. 蚜蟲其他の害蟲を認めたる時は直ちに驅除すべし。
7. 九、十月頃氣温稍低下し苗より走蔓の發生せるものは之を除去し苗の生育充實を圖ること。
8. 苗養成の假植床には充分肥料を施し猶本植までに1—2回追肥を施し生育を促すこと。

## 二、成 歡 瓜

**主産地及品種の性状** 成歡瓜は甜瓜(學名 *Cucumis Melo, L.*)の一品種にして支那種系統に屬す。本種の主産地は朝鮮中清南道成歡地方にして滿洲地方に於て栽培せらる、哈嘆酥は本種と同一品種なり。本種は他の甜瓜に比して草勢頗る強健にして葉は稍濃綠色を呈す、葉形は長卵形にして果頂部には隆起せる圓形の臍あり外皮には綠色濃淡の縦縞あり且虎斑狀を呈し表皮は稍粗面なり、1果の重量550g内外あり肉色は外皮に接したる部分は淡綠色なれ

さも其他は黄橙色を呈す、肉質脆軟甘味多く香氣稍高くマスクメロンに類似し味良好なるを以て之が栽培は將來有望なるべし。

**栽培時期** 甜瓜は温暖乾燥を好む作物なるを以て本島北部地方に於ては冬及早春の季節を除く期間に於て生育良好なり、就中春季二月下旬乃至三月上旬播種し六、七月收穫し或は夏季七月下旬乃至八月上旬播種し十月中旬乃至十一月上旬收穫するを可し、又中南部地方に於ては春季二月初播種し五、六月に收穫し或は秋季(雨期後八、九月以後)播種し冬春乾燥期中に於て收穫するを可し。

成 歡 瓜



**栽培法** 苗仕立一本種の栽培には苗を仕立て定植する法と直播する法の2法あり。本島北部地方に於て春播適期の二月には氣温猶稍低く屢々降雨ありて常に濕潤なるを以て苗仕立法に由るを可し、其他に於ては直播するを可し。苗床は何れに於ても南西に面し東北面には防風装置を設けて日當り良く温暖なる場所を選ばべし。苗床用土は肥土3、砂質壤土5、燒土2位の割合し之に適宜施肥して3—4粒を點播し又は條播とす、猶集約なる方法は徑、高さ共に10cm内外の素燒植木鉢又は粘土製植木鉢を用ひ之に用土を充

し床地に並列し1鉢3—4粒宛を播種し發芽後間引きて1鉢2本とし本葉2—3葉の時之を本圃に定植す。

本圃一栽培地の土質は排水良好なる砂質壤土を最も良とす、稍埴質の土壤にありては高畦とし土地の乾燥を圖るべし。

整地の方法は畑地を深耕し土塊を碎き砂質壤土地にありては畦上1.5m畦溝20cm 稍埴質なる土地にありては畦上1.2m 畦溝60cm の高畦を作り畦の中央に深さ18cm 内外の溝を掘りて之に元肥を施し土壤を良く混和し覆土し高畦を作り株間60cm 毎に徑20cm 内外の圓形揚床を作り之に定植す。

直播一本圃に於ける圓形揚床の中央に液肥を施し之に5—6粒の種子を下し燒土を以て覆土す。

#### 肥料 10a 當施肥量

肥料名	元肥	追肥					計
		第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	
	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
堆肥	1,500	—	—	—	—	—	1,500
大豆粕	300	—	—	—	—	—	300
過磷酸石灰	20	—	—	—	—	—	20
人糞尿	375	—	—	375	375	375	1,500
鯨粕	—	4	6	15	15	20	60

元肥は定植前に施し追肥第一回は定植後1週間目位に株の一側に浅き溝形を附して之に施し覆土す。第二回は其後1週間を経て他の一側に同様の方法にて施し第三回は其後2週間を経て株の廻りに施用す。第四回は株と株との中間に浅き溝を掘りて之に施し第五回は其後2—3週間を経、蔓の50cm 内外に伸びたるまき畦の上部兩側に溝を掘りて施し同時に中耕培土を行ひ畦を蒲鉾状の高畦となす。但追肥施用期は其生育状況により斟酌するものとす。

管理 間引一直播せるものは發芽後生育順調にして子葉正しく整へるもの1株3本を残し他は之を除去し本葉3葉を生じたる時猶1本を除去し2本とし1株2本立のものは此2本を生育せしむ、1株1本立のものは生育強剛

にして摘心後の生育状態の整へるもの、みを残し他を剪除す、直播法に依らず移植せるものも之に準じて間引きを行ふ。

整枝及摘心—甜瓜は親蔓に雌花を着生するこゝ晩く且稀なれども子蔓以上の側枝には各枝の第一葉目又は第二葉目に雌花を發生するものなれば、親蔓は早く摘心し子蔓及孫蔓の發生を早むるこゝ肝要なり、故に之が摘心の有無巧拙は甜瓜栽培の秘訣とも稱すべく最も必要なる作業なりとす。

今農業部に於ける摘心法を掲ぐれば次の如し。

1株1本立法にありては本葉5葉を生ぜしき4葉を残して摘心し、4枝を發生せしめ、此子蔓4枝を主枝とし四方に伸長せしむ。之より發生せる孫蔓の第一葉目又は二葉目に結果せしめ結果せるものは其先端1葉を残して摘心す。而して4本の主枝は50cm 内外にて摘心す。猶親蔓の基部其他より發生せる側芽は全部之を除去し氣通を計る。病蟲害其他により生育中障碍多きを豫想せる場合は1株に2本以上の母本を残すこゝあり、此場合は1本の母本より發生せしむべき結果主枝の數を減じ、1株より發生せしむべき結果主枝を限定して生育せしめ蔓の繁茂を中庸に保たしむべし。

敷薬—莖葉の汚損を防ぎ且土地の乾燥を防ぐ目的を以て圃地に敷薬をなす、敷薬は初め株元に切薬を敷き、後蔓の伸長に伴ひ中耕土寄の際2—3回之を行ふ。

花粉媒助—雌花開花を始むれば毎朝花粉の媒助を行ひ結實を助くべし。

灌水—苗の移植當時は勿論其他の時に於ても土地の乾燥甚しき場合は朝夕灌水して常に適當の水濕を保たしむべし。

#### 病蟲害

病害—成歡瓜は他の甜瓜に比し草勢強健にして栽培易容なれども甜瓜粉病(Sphaerotheca fuliginea (schl.) Sawada.) 甜瓜露菌病(Peronosplasmopara Culensis (B. et. C.) Clint) 根腐れ等發生し被害を蒙るを以て注意すべし。之が一般的防除法を掲ぐれば次の如し。

1. 栽培地の土壤は砂質壤土を選び常に排水に注意すべし
2. 生育中硫化カリ液、石灰ボールド液(八、八式)等を數回撒布すべし。
3. 罹病莖葉は速かに除去すべし。

害虫—甜瓜の害虫中主なるものは「ウリハムシ」「タイワンクロウリハムシ」「タイワンオホコホロギ」「タマナヤガ」「ワタアブラムシ」「ウリノメイガ」「ウリミバヘ」等にして就中「ウリハムシ」「ワタアブラムシ」「ウリミバヘ」の被害最も多きが如し。是等に對する一般的防除法を擧ぐれば次の如し。

1. 防蟲網使用—「ウリハムシ」其他の襲來を防ぐため木綿網製徑高さ共に30 cm内外の蟲除網を被ふ、網は夕刻除去し早朝覆ふを可ます。1枚の價格4—5錢にて3—4回栽培の使用に堪ふるが如し。
2. 根元に除蟲菊粉撒布—根に「ウリハムシ」の幼蟲侵入し果の成熟前蔓を枯死せしむるこも多きを以て蟲除網使用後2—3回根邊に除蟲菊粉末1株當2—3gを撒布し成蟲の根邊産卵を防ぐべし。「ナフタリン」粉末少量を根邊に撒布するも前同様の効果を齎すも稱せらる。
3. 根邊に毛髮纏繞—防蟲網を使用せず「ウリハムシ」の防除をなすには種々の方法あるべきも、女の頭髮「スキゲ」の廢物又は之に類するもの（棕櫚の毛其他）を幼植物及蔓の根邊に纏繞し置く時は「ウリハムシ」の之に近寄るもの少く若し毛内に這ひ入りたるものは容易に之を捕殺驅除することを得べし。
4. 捕蟲網使用—生育中殊に植物の幼時「ウリハムシ」の被害多きを以て捕蟲網を用ひ捕殺すべし。
5. 驅蟲劑撒布—「アブラムシ」其他害虫驅除として生育中數回除蟲菊石鹼合劑、デリス劑、硫酸ニコチン等を撒布すべし。
6. 袋掛—「ウリミバヘ」其他果實に被害を與ふる害虫多き場合は開花後着果確實認めたる時、幅15 cm長さ20 cm内外の紙袋（新聞紙其他）を掛け果の損傷を防ぐべし。

**收穫** 果は開花後35日内外にて成熟す、成熟の徴候は外皮全體淡黄色を帯び稍香氣を發するを以て此時期を逸せず收穫すべし。

**試作成績** 中央研究所農業部に於ける昭和九年度の試作成績を掲ぐれば次の如し。

**播種期** 昭和九年八月七日（水稻跡作直播）

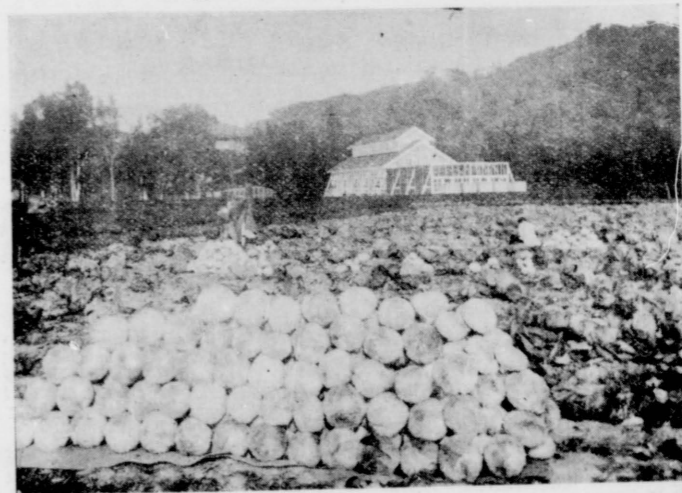
畦幅株間	壘上 1.2 m 畦溝 60 cm 株間 60 cm
一株本數	間引きて1本こす
開花始	九月三日、成熟期 十月八日、收穫期 十月八日乃至十月二十八日
10 a 當收量	1,518 kg 2,783箇
一果重量	最大 1,060 g 平均 549 g

風味—本島にて近年栽培せらるゝ金甜瓜及其他の甜瓜より風味良好なり。

### 三、三池甘藍

**産地** 三池甘藍には早生及中生の2品種あり。本記事に於ては三池中生種に就き記載す。本種はサクセツション種より淘汰選擇せる品種にして福岡縣三池郡地方は其主産地なり。同地方に於ける採種々は福岡縣廳農務課内蔬菜採種組合聯合會より販賣せらる。又別に横濱植木株式會社及其他の種苗店に於ても販賣し居るが如し。

三池中生甘藍 10 a 當收量 6,000 kg



本島に於ける甘藍の栽培状況 甘藍（學名 *Brassica oleracea* L.）は本島に於ては主として晩秋より翌年春季迄の比較的高温ならざる期間に栽培せられ、

猶此前後期にも多少生産せらる。全島に於ける栽培状況は年々大なる變動なく栽培面積 1,700 甲歩生産高 4,500 萬斤内外なり。生産品の多くは島内にて消費せらる、も内地及鮮滿地方の生産時期と多少異なるため移輸出に適し、本島に於ける將來有望なる蔬菜の一たり。

**栽培時期** 從來本島に於ける甘藍の栽培時期は七月上旬乃至十月下旬に播種し十一月上旬乃至五月上旬に收穫するを普通とす。然るに三池中生甘藍は從來のものに比し早期出荷及晚期出荷用の栽培に適し、早植せるものは約半箇月早く十月中下旬より收穫を始め、晩植せるものは 1 箇月以上遅く收穫して六月中下旬市場品薄の際に收穫し出荷することを得。即ち本種は元來は中生種なれども本島にては實驗上早生及晩生甘藍として栽培すべく、長期に互り生産し葉肉軟質にして結球充實し品質優良なり。

本島に於て栽培せらる、甘藍及三池中生甘藍の栽培時期を表示すれば次の如し。

	播種期	移植期	收穫期	主なる品種 及 10 a 當收量	備 考	
從來 品種	早出栽培	自 6 月下旬	自 8 月上旬	自 11 月上旬	臺灣種 { 自 2,000 至 5,000	臺灣種は元支那種を本島に於て播種せるものにして早生種となり播種すること早し  直輸入支那種は稍晩生にして球太く結球容易球扁圓にして濃綠色本島にて採種することを得  サクセツションは前 2 品種に比し、球小なるも品質良好晩生にして本島に於て播種することなきを以て圃場に永く置くことを得  球の太さ中位、品質良好、收量多きを以て有利なる品種なり
		至 8 月上旬	至 9 月上旬	至 12 月上旬		
	普通栽培	自 8 月中旬	自 9 月中旬	自 12 月中旬	臺灣種 { 自 3,000 至 5,000 支那種 { 自 3,000 至 5,000 サグキ 種 { 自 2,000 至 3,000	
		至 9 月下旬	至 11 月上旬	至 3 月下旬		
	晩出栽培	自 10 月上旬	自 11 月中旬	自 4 月上旬	支那種 { 自 2,000 至 3,000 サグキ 種 { 自 1,500 至 2,500	
		至 11 月下旬	至 1 月中旬	至 5 月上旬		
三池 中生	早出栽培	自 6 月下旬	自 8 月上旬	自 10 月中旬	三池 中生 { 自 2,000 至 4,000	
		至 8 月上旬	至 9 月上旬	至 12 月上旬		
晩出栽培	自 11 月中旬	自 12 月下旬	自 4 月上旬	三池 中生 { 自 3,000 至 6,000		
	至 1 月下旬	至 3 月中旬	至 6 月下旬			

**耕種概要**

苗床 條播又は撒播(薄播を可とす)

假植 特に假植の必要を認めざるも間引苗は之を假植し、生長せしめて後定植す。

畦幅 1.5 m (5 尺) の畦に二條植又は 75 cm (2 尺 5 寸)

株間 45 cm (1 尺 5 寸)

肥料 (10 a 當普通施用量)

元肥 3,000 kg 大豆粕 100 kg 人糞尿 500 kg 過磷酸石灰 30 kg

追肥 人糞尿 1,500 kg (3-4 回に分施) 但本種は普通施用量に比し施用肥料多きを可とす。

其他 一般栽培に準ず(臺灣農家便覽參照)

**四、タロ (Taro)**

タロー(學名 *Xanthosoma violaceum* Schot.) は南洋地方の原産にして莖葉其他の状態里芋に似たるも里芋に比し葉の切目深く葉柄に達し葉を破るときは乳白狀の汁を出す、草丈高く 2 m 内外に達し葉柄太く子芋は大にして稍長卵形をなし煮食用に適し親芋よりの新芽は之を軟白して芽芋となし、葉は豚の飼料とすことを得。

**氣候及土質** 性强健にして温暖なる氣候を好み本島に於ては殆ど周年之れが栽培に適せり。夏季高温多濕なる時に於て特に生育良好なり。本種は種々の土壤によく生育するも有機物に富みたる壤土又は砂質壤土を最適とす。

**品 種**

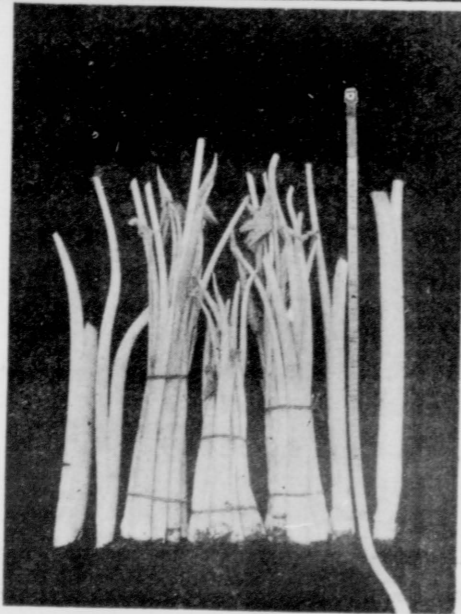
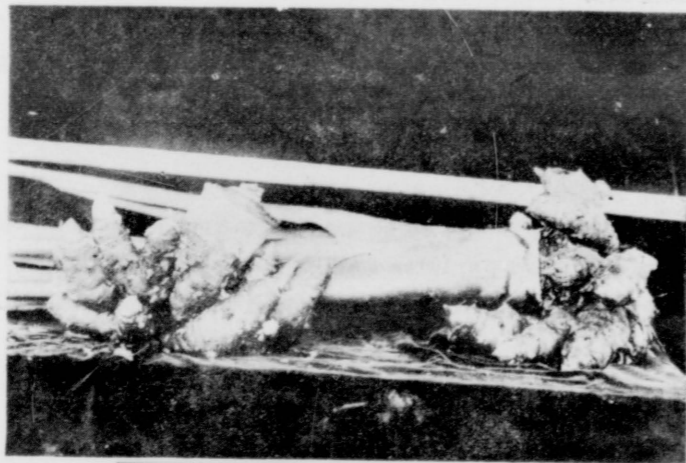
青莖種一芽、葉柄葉身共に綠色を呈し子芋を生ずること多し、子芋の食味は里芋に類似し肉質は粉質にして味良好なり。

紫莖種一芽、葉柄、葉脈共、稍濃紫色を呈す。其他は前種と大差なきも收量稍少し。

**栽培法**

整地及栽植一畑地を深耕し町畦に土塊を碎き畦幅 90 cm とし其中央に深さ 20 cm 内外の溝を掘り元肥を施し之に覆土、株間 45 cm 毎に種芋 1 箇宛を栽

タロ



軟白せるタロ

植す。

種芋—種芋は中形にして1箇重量100g内外のものを用ふ。大なる種芋を用ふる時は小なるものに比し生育良好にして収量多し。種芋不足の場合には大なる子芋を2—3箇に切断して用ふ。

肥料10a 當施用量

肥料名	元肥	追肥			計	所含三要素量		
		第一回	第二回	第三回		窒素	磷酸	加里
	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
堆肥	1,500	—	—	—	1,500	8,700	4,500	7,500
人糞尿	—	375	375	375	1,125	6,413	1,463	3,038
大豆粕	56	—	—	—	56	3,634	0,684	1,218
過磷酸石灰	22	—	—	—	22	—	3,300	—
計						18,747	9,947	11,756

元肥は栽植直前に施し、追肥は栽植後2箇月を隔て株間及畦の兩側に施用す。

管理 各追肥施用の際中耕除草及培土を行ひ草丈1m内外に伸長せし時畦間溝中に敷藁をなし畑地の乾燥を防ぎ、尙夏季乾天持續の場合は時々灌水して生育を助くべし。

收穫 栽植後10箇月内外にして子芋肥大し1箇200g内外となりたる時掘り取り親芋及子芋に分つ。子芋は煮食用とし親芋は芽芋栽培用に供せらる。されば五、六月の頃栽植せしものは翌年三、四月以後市場に於て里芋品薄の時期に出荷し得るものなり。子芋10a 當収量5,000kg内外なり。

芽芋栽培 芽芋は芋の新芽を軟白せるものなり。小芋を用ひて軟白せる根の附着せるものを根芋と稱し、親芋を用ひて大なる新芽を軟白せるものを「ズイキ」と稱するこゝろあれど共に芽芋と稱すべし。

芽芋の栽培は低温時にありては特に軟化室或は軟化床等により發熱物を使用して良品を生産し得るも、本島に於てタローは周年發育するを以て發熱材料を用ひず單に暗所に於て生長せしむるこゝろにより軟化を行ひ得るものなり。種芋には親芋及子芋を共に使用し得るも親芋を用ふれば生育殊に良好にして且収量多きを以て有利なり。

軟化場所—古箱、藁小屋、堆肥場の一部等を利用し、光線を遮断し内部を暗黒にすることを第一の条件とす。藁小屋は内部の醗る、こみ少きを以て軟化場所としては最良なり。

**用土** 栽培用土には苗床用肥土又は其他の肥土を用ひ之に充分腐熟せる堆肥(土糞を適當とす)を等量に混じ約10cmの厚さに敷く、其上に種芋を並列し芋の間に用土を充分填充し尙上部に6cm内外を覆土す。三、四月頃栽植し適度に灌水し置く時は約2箇月後に30—40cmの長大なる芽芋を收穫し得るものなり。爾後收穫の回数を重ねるに従ひ芽芋の大きさは減するも約5箇月間に互り十數回の收穫を得べし。

昭和八年度に於ける農業部タロー軟化栽培成績を擧ぐれば次の如し。

軟化室—長さ幅共に2mの藁小屋を用ふ。

種芋—タロー青莖種親芋1a 當400kgを用ふ。

栽植期—昭和八年三月二十日

收穫期—昭和八年五月十八日乃至同年十月四日

收量—1a 當1,962kg 60,753本

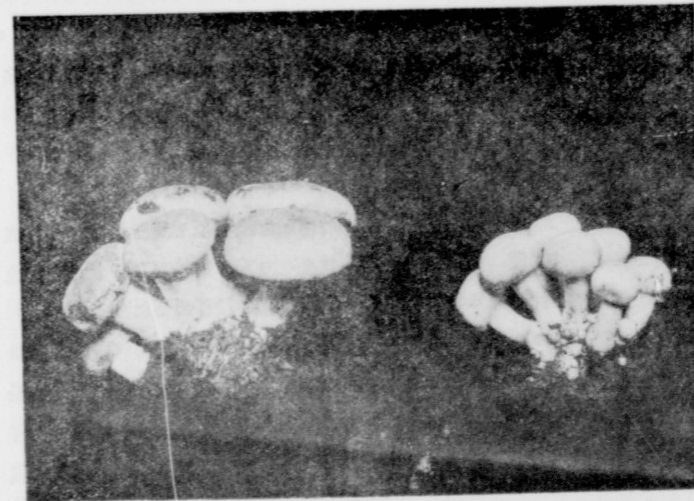
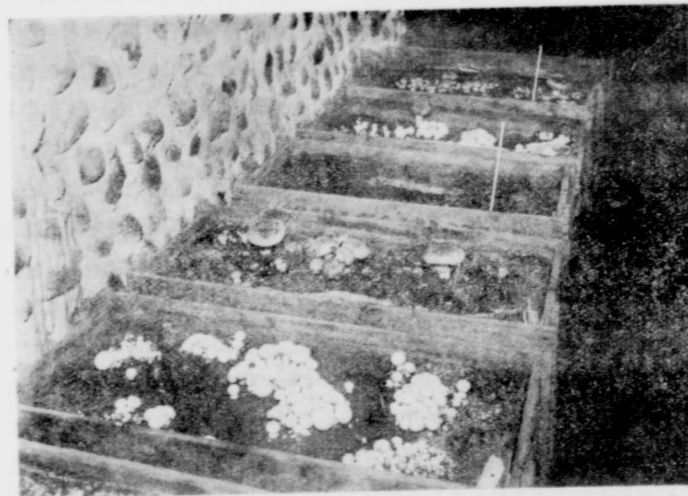
前記の外更に簡單なる軟化法を示せば次の如し。

冷床、藁圃床等の内部に肥土を90cm内外の厚さに敷き之に種芋を栽植す。而して其上に枳殻、切藁又は厩肥等を約50cmの厚さに置き、嫩芽伸長して40cm内外に伸長せしこき收穫す。斯くて1箇月の間に約3回づゝに3—4箇月間引續き收穫し得らるゝものなり。

## 五、マツシユルーム

マツシユルーム英名(Mushroom)又はシャンピニオン佛名(Champignon)は、本邦にて俗に洋菌又は西洋松茸と稱することあり。マツシユルームの學名は *Psalliota Campestris* (L.) Fr. (*Agaricus Campestris* L.) (ハラ茸の一種)にして有機物に富める土壤又は厩肥床等に能く生育す。而して其生育状態は床中に白色根毛狀の菌糸を生じ、時期の至るや菌糸は床上面に球形の幼菌(ピンヘッド)を生じ次第に生長して傘狀に開く、其柄部を菌柄と稱し傘狀部を菌傘と云ふ。菌類の生殖體を成す所とす。

マツシユルーム



**来歴** マツシユルム栽培の發祥地は佛國バリー附近なるが如く、初め之が栽培せられし當時は其繁殖用の種菌は牧場、厩舎及堆肥舎等より自生菌糸を採收し來りしものなりしが、西歴1830年頃より歐洲に於て種菌を培養し繁殖用に供するに至り急激なる進歩をなし、各地に於て栽培せらるゝに至れり。現今栽培の最も盛なるは英、佛、米國なれども世界各地に廣く栽培せられ、需要甚だ多し。我國に於ては久しく新宿御苑に於て栽培せられたれども未だ一般に普及するに至らず、漸く大正十年に及び京都の森本彦三郎氏は之が栽培に成功して自己培養の種菌を廣く販賣し、又農林省園藝試験場其他に於ても之が試験研究の結果一般に紹介せられ、今や全國各地に栽培せらるゝに至れり。

本島に在りては、農業部に於てマツシユルムの栽培を研究し昭和五年より要領を得るに至れり。爾來試作を累ぬるご同時に當業者に紹介して昭和七年より多少生産品を臺北市場に出すに至れり。本種は以上の如く漸次普及しつゝ、あるものにして有望なる食用蕈なり。

**品種** 各地に於て多年栽培中自ら變種を生じ其數多きを認むれども、當部に於て栽培する品種を擧ぐれば次の如し。

1. 「ホワイト」「アラスカ」系に屬し、白色を呈し、小形又は中形の茸を多産し香氣優良なり。比較的低温にても發育良好なるが如し。
2. 「クリーム」「コロンビヤ」系に屬し、クリーム色を呈し、稍大形なれども收量少し。
3. 「ブラウン」「ボヘミヤ」系に屬し、褐色又は濃褐色を呈し、中形又は大形の茸を生ず。性强健にして栽培し易く豊産なり。汁物さなす時少しく着色するを缺點とす。汁物以外の料理に於ては色澤其他松茸に似たり。

**栽培時期** マツシユルムは高温を忌み攝氏10度乃至20度内外にて發育良好にして32—33度以上に及べば病害のため腐敗するご多し。故に本島に於ては十月乃至四月迄を栽培適期とす。播種後50—60日にて蕈を發生し、其後採收期間60日内外なるを以て1作の栽培は凡そ120日に互る故に十月中旬栽培に着手する時は十二月中旬より採收を始め二月下旬收穫を終る。又二月

上、中旬播種せしものは四月上、中旬に至り高温の爲、收穫中期に於て發病腐敗し栽培を終る。

**栽培室** マツシユルム栽培の適所は氣通充分ならず外氣の影響少き場所を可とす。故に鑛坑、鐵道の不要墜道、地下室等を利用するごあり。

四圍土角作りの本島人家屋、堆肥場等に於ても亦之が栽培に適す。マツシユルムは光線を忌むものとして、その環境を特に暗くせる設備の中にて栽培せらるゝを普通とすれど、小規模の培養の際には麥酒箱等の小箱を用ひて之を縁下、床下又は物置小屋等に置き強き光線の當らざるやうせば能く栽培し得るものなり。

**菌床材料** 菌床材料は主として厩肥を使用す。本島にては特に馬匹の排泄物より得るものなるごを注意するを要す。此厩肥は敷薬の種類により菌床とて適不適あり、最も良好なるは燕麥、ライ麥等の稿程にして稻藁之に次ぎ乾草、生草等を材料とせる厩肥は適當ならざるが如し。厩肥中馬糞の割合は普通敷薬の3分の1以上なるべく、馬糞の量多きを可とし従て馬糞のみを用ふる時は成績最も良好なり。

牛糞は從來種苗製造用さなし又馬糞、稻藁等ご共に用ふ。牛糞は栽培用として馬糞に及ばざれども、試験の結果牛糞床1m<sup>2</sup>につき硫酸500gを混合し馬糞に劣らざる成績を擧げ得たり。

**菌床材料の醱酵法** 菌床材料は詰込前之を醱酵せしめて後使用するものにして、材料を均質ならしむるため堆肥舎に於て普通幅1m乃至1.2m(3.4尺)高さ60cm乃至1m内外の長方形に積み、4—5日にして1回の切返を行ひ4—5回之を繰返せば之を完成するを普通とす。故に菌床の醱酵には1箇月内外を要するを以て詰込時期を推定し本作業を開始せざるべからず。切返の方法は各面共に灌水して外部を内部に上部を下部に反轉すべし。過度の醱酵は之を防ぎ温度漸次下降し攝氏50度内外さなり敷薬が一様に褐色を呈して最早や厩肥特有の臭氣を有せざるに至りたる時を適度とす。急激なる乾燥を防ぐため約2割内外の土を混するを可とすることあり。灌水に用ふる水は馬尿、漏液を以てするときは成績良好なるが如し。而して水濕の程度は固く握り締

むるも除液滴下せず之を開けば掌に水の附着し居るを適度とす。

**菌床の作り方** 菌床には上面を平にする畦状に中央を高くするものもあり、何れの場合も材料は充分攪拌して糞と敷薬とを均等に混合し灌水して適度の濕分を保たしむ。

平床—木框又は木箱を用ひ或は室の地面に直接栽培する時、何れの場合も先づ最初に床の厚さの3分の1に相當する材料を平に敷き足にて踏み詰め、次に3分の1を其の上に布き充分壓し、最後に残りの3分の1を以て厚薄硬軟の差なき様均一に詰め込むべし。鎮壓の程度は人により多少異なれども、人が床上に立てば5—6cm沈下する位を適度とす。詰込の厚さは12cm以上20cm内外たるべし。特設の室以外の木框、木箱等にありては床面の乾燥を防ぐため蓋又は蓆、菰等を以て覆をなすを可とす。床の長さは適宜なるも幅は管理上兩側又は片側より手の届く範圍即ち1m内外なるを便利とす。厩肥の詰込量は3.27 m<sup>2</sup> (1坪)に對し375 kg (100貫)内外たるべし。

畦床—畦床の特徴とする所は床面を畦状に高く盛りて草の發生面積を大にするに在り。畦の高さ及形狀は任意なれども平床に比し常に濕分を適度に保つこと稍困難なり、又同一面積に對する菌床材料の用量は畦の高低により異なれども概して平床に比し多量を要す。

**種菌** 種菌とはマツシユルム菌糸に對する栽培上の用語にして、栽培上種子用とし特定の取扱をなしたる菌糸の集團なり。現今種菌として用ひらるるものはフレイクスポーン、ブリックスポーン純粹培養其儘のもの及野生ヴァージンスポーンの4種あり。普通前2種を用ふ。

(1) フレイクスポーン (Flake spawn) 野生採取菌又は孢子培養菌或は組織培養菌等を普通栽培と同様の床に栽培し菌糸の普く蔓延したる時之を種菌として栽培床に移植(下種)するか又は其一部を採り乾燥貯藏し後日の栽培用に供するものなり。

(2) ブリックスポーン (Brick spawn) 此種菌は其製品が煉瓦狀なるを以て名付けられたるものなり。馬糞、牛糞、切藁、土壤其他を混合し厚板狀に

固め之に前記菌糸を繁殖せしめ、乾燥して貯藏及運搬に便ならしめたるものなり。

(3) 純粹培養其儘のもの 孢子又は組織による純粹菌を培養し培養基と共に栽培用種菌とするものなり。

(4) ヴァージンスポーン (Virgin spawn) 主産地佛國及英國に於ては野生菌の發生せる場所の地表の芝を剥ぎ小溝を穿ち豫め作り置きたる腐熟厩肥を其内に詰め再び芝を原位置に復し置く時は、其附近の菌糸直に之に侵入し來り數週間にして蔓延充塞するを以て、之を直に栽培用に供し又は更に繁殖して大量栽培用に利用す。然れども我が國に在りては野生菌なきを以て此方法によること能はず。

下種—菌床材料を詰込みたる後2—3日にして攝氏35度以上に上昇し後2—3日を経て温度稍下降し詰込後1週間内外にして攝氏22—23度となりたる時を度とし種菌を下種す。下種用種菌ブリック1坪用なるときは36片、半坪用なるときは18片即ち1尺平方1片の割合に切斷して充用すべくフレイクは一握宛とす。下種の方法は床面所定の場所に深さ4.5cm (1寸5分)の穴を掘り種菌を埋め掘りたる材料を以て再び覆ひ鎮壓し床面を均らし置くべし。

覆土—下種後2—3週間を経過すれば床面に少しく白色の菌糸を認むるを以て此時覆土す。覆土用の用土は人により種々説をなすものあれども當部試験の結果によれば菌床用土又は堆肥場附近の肥土等有機質を多量に含有するものを用ふれば成績良好なるを認めたり。覆土の厚さは3cm (1寸)を標準とす。覆土用土の濕度は握れば固まり落せば碎くる程度を可とす。

#### 管 理

(1) 溫度—室内及床面は常に適當の濕氣を保たしむるを要す室内空氣の乾燥する場合は灌水して濕度を高め同時に床面の乾燥を防ぐべし室内の溫度は八十度内外を可とす。

(2) 灌水—菌床の乾燥に失するときは菌糸塊(小球體又はピンヘッドとも言ふ)の發生を阻害し表面にピンヘッドを生ぜずして小球體時代には外部

より見ることを得ず發育著しく不良となるものなり。故に適宜灌水して濕氣を與へ發育を助くべし。灌水は未だ蕈の發生せざる間は晴天なれば4—5日に1回位全面に撒水すべく、既に蕈の採收時に入らば可成蕈に灌水せざる様注意し、如露は細口のものを用ひ水を蕈の中間に灌ぐべし。

**收獲** 下種より收獲迄の日数は菌床材料、温度、乾濕等の條件により一様ならざれども、大體に於て下種後2週間に覆土せば覆土後40日内外にてビンヘッドの發生を認め約2週間後より收獲を始む。收獲期間は凡そ2箇月に亙るものなり。收獲適期は用途により異なれども普通菌傘下被膜の破れんとする1日前位にして菌傘の表面に少しく鱗片状のもの、生じたる時す。罐詰用其他特に上等品を得んとする時は猶1日前に收獲すべし。

收獲の方法は茸の基部兩側を左手二指にて押へ右手三指にて傘部を軽く挟み捻じ廻せば容易に抜き取ることを得べし。若し此時手荒く取扱ふときは基部の菌床に穴を生じ他の小球の發育を妨げ又は菌柄を折損することあるを以て丁寧に取扱ふを要す。多數の幼蕈一塊となり、簇生せるものは其生長せる1箇を採收せんがため他を犠牲に供することあるを以て其小群中の大部分が生長し收獲適期となりたるを收獲すべし、此時一、二過大に失するものあるも亦止むを得ざるべし、收獲後は床面の收獲跡に生ぜる小穴に灌水して覆土に用ひたる土を填充し少しく壓して均らすべし。

採收したる蕈は丁寧に容器に一列に並べ、冷涼なる場所に貯藏すべし。收獲後長く外氣に曝露するときは表面乾燥し品質を害す。

## 害 敵

### 1 病 害

(A) 床面に白色絮状の雜菌を生じマツシユルムの發生を害することあり、當部に於ては此發生を認むるや直に其部分を覆土と共に除去し新に覆土をなす。

(B) 幼蕈の傘上に灌水のかゝりたる時又は高温にして攝氏22—23度以上を上昇せる時は菌傘の上部に褐色の斑點を生ずることあり、其發生多き時は生長を停止し遂に腐敗することあり、病原明かならざれども一種のバクテリ

ヤなるが如し。之が豫防法としては(イ)灌水の際幼蕈に水の掛からぬ様注意すること(ロ)床面灌水後は室を開放して附着せる水分を早く發散せしむること(ハ)病害激しき場合はクレゾール2—3%液を撒布すれば生育を始めたる蕈は一時全部枯損すれども後却て健全なるものを發育せしめ得べし。

## 2 鼠 害

苗床詰込後屢鼠害を被むることあるを以て捕鼠器を用ひ又は其他方法により鼠の驅除を行ふべし。

**種菌培養** 種菌には前記の如くフレックスボーン、ブリックスボーン、純粹培養等種々あれども農業部に於て培養する組織培養法を記せば次の如し。

材料—腐葉、腐熟堆肥、馬糞、芝根の腐熟せるもの麩、麩汁等は何れも培養基として適當に認むれども當部に於ては馬糞の稍新しきものを用ひ廣口硝子瓶中に約八分目位軽く詰め込み綿栓して殺菌す。

殺菌—攝氏百度以上の温度にて2時間宛2回計4時間消毒器に入れ殺菌を行ふ。

接種—菌傘の未だ開かざる蕈を充分洗滌したる後千倍の昇水にて蕈の外部を拭ひ消毒せる利刀にて外部を除き内部の肉片を5mm立方位(大豆大)に切斷し其2—3片を培養基を詰めたる瓶の中央部に入れ固く綿栓を施し暗所に靜置する時は、二、三月頃なるときは3—4日にして菌糸を發生し順次繁殖し50—60日を経れば瓶中菌糸を以て充滿するに至る。

貯藏—培養せる種菌は其儘乾燥せる場所に貯藏し置き、十月頃播種用に供することを得れども又乾燥剤を入れたるデシケーター中に瓶のまゝ入れ乾燥貯藏するときは一層良好なり。

増殖—前記種菌は其儘播種用に供し得れども普通の栽培時期より早く九月上旬より用意し馬糞のみの菌床を作り九月下旬乃至十月上旬稍冷涼なる場所を選び箱に詰め1回増殖し十一月盛に繁殖中の菌糸を種菌として用ふる時は成績良好なり。

**栽培成績摘要** 農業部に於ける栽培成績の概要次の如し。

昭和五年度試作成績

品 種 名	播種期	收 穫 期		收穫 期間	一平方米収量		坪 當 収 量	
		初	終		重量	筒数	重量	筒数
	年月日	年月日	年月日	日	g		g	筒数
ブ ラ ウ ン	5.10.20	6. 1.10	6. 3.12	61	9,636	633	8,410	2,071

備考 菌床材料は馬糞既肥一平方米當 90kg を用ひ平床箱栽培とせり。

昭和六年度品種試験成績

品 種 名	播種期	收 穫 期		收穫 期間	一平方米収量		坪 當 収 量	
		初	終		重量	筒数	重量	筒数
	年月日	年月日	年月日	日	g		g	筒数
ブ ラ ウ ン	6.12.16	7. 2.18	7. 4.20	62	9,185	381	8,015	1,246
ホ ヲ イ ト	6.12.16	7. 2.14	7. 4.22	68	9,360	664	8,169	2,174
ク リ ー ム	6.12.16	7. 3.17	7. 4.17	32	558	46	487	153
興津ブリック ホ ヲ イ ト	6.12.16	7. 2.20	7. 4.23	63	6,223	468	5,430	1,532

備考 菌床材料は馬糞既肥一平方米當 90 kg を用ひ平床箱栽培となせり。

菌床に関する試験

品 種 名	試験別	播種期	收 穫 期		收穫 期間	一平方米収量		坪 當 収 量	
			初	終		重量	筒数	重量	筒数
		年月日	年月日	年月日	日	g		g	筒数
ブ ラ ウ ン	平床	6.12.16	7. 2.28	7. 4.23	55	5,633	275	4,917	900
ホ ヲ イ ト	//	6.12.16	7. 2.12	7. 4.23	71	3,243	255	3,829	799
ブ ラ ウ ン	畦床	6.12.16	7. 2.15	7. 4.21	66	10,489	374	9,155	1,223
ホ ヲ イ ト	//	6.12.16	7. 2.14	7. 4.23	69	6,258	413	5,462	1,350

備考 菌床材料は何れも馬糞既肥を用ひ平床は一平方米當既肥 90kg の割合にて箱栽培とし畦床は幅 90cm 長さ 1.20m の板上に材料を梯形の高畦壇状に盛り栽培せり。

昭和七年度播種期試験成績

品 種 名	播種期	收 穫 期		收穫 期間	一平方米収量		坪 當 収 量	
		初	終		重量	筒数	重量	筒数
	年月日	年月日	年月日	日	g		g	筒数
ブ ラ ウ ン	7.11.16	8. 1.21	8. 3.18	57	4,959	323	4,328	1,056
ホ ヲ イ ト	7.11.16	8. 1.24	8. 4. 4	71	11,282	683	9,846	2,236
ホ ヲ イ ト	7.12.15	8. 2.25	8. 4. 6	41	5,358	461	4,677	1,507
ブ ラ ウ ン	7.12.15	8. 2.10	8. 4. 6	56	5,642	285	4,920	934

備考 菌床材料は馬糞既肥一平方米當 90kg を用ひ平床箱栽培とせり。

昭和八年度既肥材料及硫酸使用試験成績

菌床材料	硫酸	品 種 名	播種期	收 穫 期		收穫 期間	一平方 米 収 量		坪 當 収 量	
				初	終		重量	筒数	重量	筒数
			年月日	年月日	年月日	日	g		g	筒数
馬 糞	無 // 施用	ブラウン	8.12.2	9.1.31	9.3.26	55	3,725	207	3,251	677
		ホワイト	8.12.2	9.1.16	9.3.26	66	5,500	363	4,800	1,189
		//	8.12.2	9.1.16	9.3.11	55	5,167	438	4,510	1,430
牛 糞	無 // 施用	ブラウン	8.12.2	9.3.10	9.3.22	13	399	16	0,349	51
		ホワイト	8.12.2	9.2.24	9.3.26	31	940	44	0,820	144
		//	8.12.2	9.1.12	9.4. 6	85	6,275	473	5,477	1,548

備考 既肥は一平方米當 90kg を用ひ平床箱栽培とし硫酸施用区には一平方米當硫酸(窒素20%のもの)500g を施用せり。

既肥詰込量多少に関する試験

菌床材料	品 種 名	一平方 米 詰 込 量	播種期	收 穫 期		收穫 期間	一平方 米 収 量		坪 當 収 量	
				初	終		重量	筒数	重量	筒数
		kg	年月日	年月日	年月日	日	g		g	筒数
馬 糞	ブラウン	45	8.11.20	9. 2. 6	9. 3.22	45	1,175	69	1,026	225
	//	90	8.11.20	9. 1.29	9. 3.12	43	3,960	257	3,456	841
	//	135	8.11.20	9. 2.10	9. 3.29	48	7,580	439	6,615	1,436

備考 平床箱栽培とせり。

播種期試験

品 種 名	播種期	收 穫 期		收穫期間	一平方米収量		坪當収量	
		初	終		重量	箇數	重量	箇數
	年月日	年月日	年月日	日	g		坪	
ブ ラ ウ ン	8.11.20	9. 1.31	9. 4. 6	66	5,452	345	5.087	1,128
〃	8.12.20	9. 2.10	9. 3.23	42	3,773	244	3.292	800
〃	9. 1.22	9. 3.20	9. 3.26	7	462	60	1.108	190
〃	9. 2.17	9. 4.14	四月上旬高温のため発生せる幼草の腐敗せるもの多く、生長充分ならず。					
ホ ワ イ ト	8. 2.20	9. 1.16	9. 4. 6	81	5,970	505	5.210	1,651
〃	8.12.20	9. 1.31	9. 3.20	49	6,134	492	5.354	1,610
〃	9. 1.22	9. 3.20	9. 4. 9	21	1,774	88	1.548	287
〃	9. 2.17	9. 4.14	四月上旬高温のため発生せる幼草の腐敗せるもの多く、生長充分ならず。					

備考 菌床材料は馬糞厩肥一平方米當 90kg とし平床箱栽培とせり。

畦床栽培試験

品 種 名	播種期	收 穫 期		收穫期間	一平方米収量		坪當収量	
		初	終		重量	箇數	重量	箇數
	年月日	年月日	年月日	日	g		坪	
ブ ラ ウ ン	8. 12.2	9. 1.20	9. 4. 9	80	6,384	426	5.570	1,396
〃	8.12.20	9. 2.21	9. 4. 4	43	4,617	273	4.029	894
ホ ワ イ ト	8.12.20	9. 2.24	9. 4.14	50	4,798	347	4.515	1,139

備考 栽培場は堆肥舎壁面に沿ひたる一側を利用し幅 1m 畦高 25cm とし馬糞厩肥を用ひ栽培せり。

農業部培養種菌栽培試験

品 種 名	種 菌	播種期	收 穫 期		收穫期間	一平方米収量		坪當収量	
			初	終		重量	箇數	重量	箇數
		年月日	年月日	年月日	日	g		坪	
ホ ワ イ ト	八年四月五日當部培養種菌を其儘貯蔵せるものを前に等しきものを八年十一月一回増殖せるもの	8.12.21	9.3.22	9.4. 9	19	456	56	0.707	185
〃	八年十一月内地取寄	8.12.21	9.2.21	9.3.26	34	3,549	194	3.097	636
〃	八年十一月内地取寄	8.12.21	9.3.21	9.4.14	53	3,858	268	3.367	877

備考 菌床材料は馬糞厩肥一平方米當 90kg を用ひ平床箱栽培とせり。

化學的成分 マツシユムールの化學的成分を分析したる成績次の如し。尙主要蔬菜 3 種の成分を併記して比較す。

種 名	水 分	蛋 白 質	脂 肪	炭 水 化 物	灰 分
	%	%	%	%	%
マツシユムール	88.1	3.5	0.4	6.8	1.2
甘 藍	91.5	1.6	0.3	5.6	1.0
人 蔘	88.2	1.1	0.4	9.3	1.0
菠 薐 草	92.3	2.1	0.3	3.2	2.1

本試験調査をなすに當り、常に指導を賜はりたる技師磯永吉博士及助力を與へられたる呂天賜氏に對し感謝の意を表す。

昭和十年二月廿六日印刷  
昭和十年二月廿八日發行

臺灣總督府中央研究所

印刷者 山 科 榮

臺北市長町二丁目八番地

印刷所 山科商店印刷部

臺北市長町二丁目八番地